

年1月発足のガーナの特別資金援助水産研究所、ナイゼリア西部、中西部の水産調査もこの線に沿っている。セネガル〜コンゴ河口西阿水域の浮魚資源をチャーター研究船で地域漁業調査中である。

2) (a) 1967年6月12日からFAO主催で13日間メキシコ国メキシコシティで世界小エビ大エビ生物学及び増殖世界科学会議が開かれる。

(b) 南西大西洋漁業諮問委員会(CARPAS)第3回会議をウルグワイ国モンテヴィデオで1966年4月25〜29日開催。(アルゼンチン、ブラジル、ウルグワイ)にオブザーバー米、ノルウェー、ユネスコ、FAOが参加した。

水産統計生物サンプリングの標準化。

環境研究は海洋漁業資源研究関係の海洋学とプランクトン研究。内水面漁業開発と養魚の強化、ヘイク類の世界会議等が勧告されている。

(c) 大西洋鮪保存全権会議、FAO主催、1966年5月2〜14日、リオデジャネイロ。

17ヶ国代表と3国オブザーバーが、大西洋と隣接域のマグロ類保存条約が承認され、新しい国際理事会がこのためできることになった。7ヶ国が承認批准するときに発足する。

(d) ACMRR(FAO)に「栄養力学」(Trophodynamics)作業委員会が1964年で、1968年秋ごろICES年会(コペンハーゲン)に結びつけてシンポジウムをFAO, ICNAF, ICES, IOC, IBPの共催でひらく予定。4つの重要課題(どのようにして食物摂取と自然生物資源量を計測し、どのようにして栄養水準間のエネルギー移譲の効率程度をきめるか)を調査する。食餌―捕食者関係に有意義とされる諸因子の測定定義も吟味する。色々の問題(無生有機物の再使用;底棲生態学;生存能力の現場指標と自然生物資源の生産ポテンシャル;魚群体への食餌制限;色々な生物種による生活史上の各期の栄養水準の効率推定に及ぼす影響、海産動物の栄養力と生物の大きさの意義の研究)がとう上げられた。

色々な因子を入れて多少とも数学的に扱った栄養力学を目指している。

15 オーストラリアのミナミマグロ標識

出所: CSIRO Fisheries and Oceanography 1965-1966 Annual Report

ミナミマグロ(Southern bluefin tuna)の標識放流は活発に行なわれている。

第1表 ミナミマグロの標識状況

東 部 豪 州			南 部 豪 州			西 部 豪 州			これまで合計
1959~	放流 3079尾	1961~	放流 5898尾	1962~	放流 17,852尾	26,830尾放流			
65年	再捕 408尾	66年	再捕 179尾	66年	再捕 613尾	捕(内36尾は			
						タスマン海操業			
						日本漁船報告)			

中部クインズランド沖合300哩以内で双発機による魚探でキワダマグロ群を1965年8月〜11月捜索した。マグロ等釣船を伴う群浮上せず。深層遊泳生物をたべていた魚を陸棚縁や孤立礁付近で若干とつた。さらにタスマンヤ水域で1月〜6月双発機に赤外線放射温度計をつけて空から水温分布をはかりながら調査、距岸200マイル、なお3月西部ヴィクトリア州水域も距岸50哩調査した。この方面にはカツオ群も相当量発見、カジキ大群も見られた。1966年3月5日アジ群(*Trachurus declivis*)10万トン推定量をSchouten島とKing島の間に見る。